

日本史コース

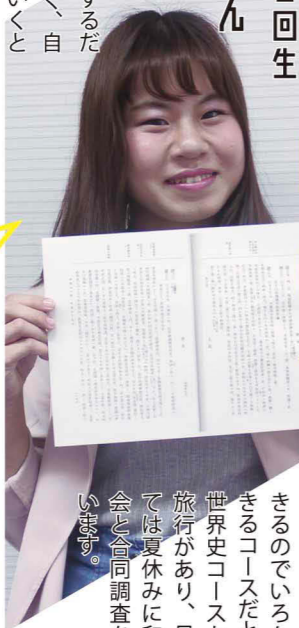
先生に聞いた

日本史コースとは

日本史コースでは古文書・日記・書物・考古遺物といった史料を読むことを大切にしています。高校までの日本史は人名や年号などを覚える暗記科目のイメージが強いかもしれませんが、大学の日本史では史料をきちんと読みこなし、そこから一つでも多く情報を引き出して自分が興味関心のある過去の時代・出来事を再構成するということを学びます。教科書に

日記を読むと過去の人物と対話ができる(磐下先生)

日本史コース3年生 松岡美里さん



書かれていることを暗記するだけの受け身の勉強ではなく、自ら発見して明らかにしていくという意味ではとてもクリエイティブな営みだと思います。教員の研究分野は古代史から近現代史と幅広く、五人の共通テーマとしては「大阪の歴史」を特に都市史を中心に取り組んでいます。

先生に聞いた

私のオススメの人は前田利家の正室、まつです。まつは戦国を代表する賢妻の一人で、一族繁栄のために政治力を発揮します。家康から人質としてまつを差し出すことを要求されたとき、家督を継いだ長子の利長に「家のためには母を捨てなさい」と伝え、自らすすんで江戸に赴きます。肝の座った生き様がカッコいいと思います。

卒論

- ▼律令官人化政策と大伴氏
- ▼因幡国をめぐる毛利方と羽柴方の戦略について
- ▼大坂の町触から見る大工
- ▼八・九世紀外交文書からみる天皇と太政官の関係

日本史コースにとって「流行」とは？

歴史学の研究対象としての「流行」といえば、伝染病が思い浮かびます。中世ヨーロッパのペストの大流行は、社会を大きく変えたことが知られています。日本でも、歴史に大きな影響を与えた伝染病の「流行」が確認できます。例えば奈良時代の七三五〜七三七年には天然痘が大流行し、人口や生産力が大幅に低下して、政府の有力者たちも次々と病死しました。これにより、政府の統治方針が大きく変更されたことが知られています。また、こうした伝染病の「流行」は非常事態であり、通常時には確認できないような史料が残されることもあります。七三七年に出された政府の命令書の内容が伝わっています。そこには天然痘の治療法として、腰や腹を温める、お粥などを食べるようにし、魚や肉を食べるはならない、などといったことが記されています。これは、当時の医療を考えると貴重な史料といえます。伝染病の「流行」は、いうまでもなく不幸な出来事です。その一方で、過去の社会の様子や、困難を乗り越えてきた人々の生活のさまを知る、大きな手がかりともなるのです。(文・磐下先生)

私の研究テーマは今のところ大きく三つ設定しています。一つは大学院生の頃からずっと続けていて、奈良・平安時代の地方行政や各地方を治める郡司についてです。国や社会のあり方を考えるときには、中核となる権力がどのようにして地方を把握して支配していたのかを知ることがとても重要になります。また郡司の研究を通して当時の庶民の様子を窺うこともできるのではないかと思います。卒業論文のテーマに選ぶと決めました。二つ目は平安時代に貴族によって書かれた日記を讀解して当時の制度や仕組みを明らかにすることです。日記を読むことでその人が何を考えていたのか、何を記録しようと思ったのか、ということが考え方や心の有り様までわかってきて、千年以上も前の

時代の人々と対話ができるというのすごく面白いなと思います。三つ目は大阪府立大学に来てから、大阪の古代史、代表的なものとしては難波宮という遺跡や奈良時代に大阪で活躍した行基についての研究を少しずつ進めています。

オススメの人

草川庄八(1935 - 1998) 日本古代史の研究者。主著に『日本古代官制の研究』『宣旨試論』などがある。天皇制、官僚制、財政史、古文書学の分野で大きな業績を残した。史料を博搜(はくそう)した実証的な研究は、他の追随を許さない。平安時代の史料を用いて奈良時代を論じられることを示し、その後の研究潮流に大きな影響を与えた。

コースに入ってきたきっかけ 中学生の頃から大河ドラマを見ていたのがきっかけで日本史に興味を持ち、漠然と大学に行ったら日本史を学びたいと思っていました。さらに高校までの教科書からの知識をただ単に暗記する勉強だけではなく、実際に史料に触れて自分で歴史を解明するということにも興味を持ち、日本史コースに進むことを決めました。

先生から見たコース

学生が気軽に使える文学部棟の220教室は授業の準備をしたり、先輩方もお話できる場所です。また、先生との距離も近く気軽に質問に行くことができますのでいろんな人と仲良くできるコースだと思います。毎年、世界史コースと合同での遠足や旅行があり、日本史コースとしては夏休みに和泉市の教育委員会と合同調査を2泊3日で行なっています。

哲学コース

先生に聞いた

哲学コースとは

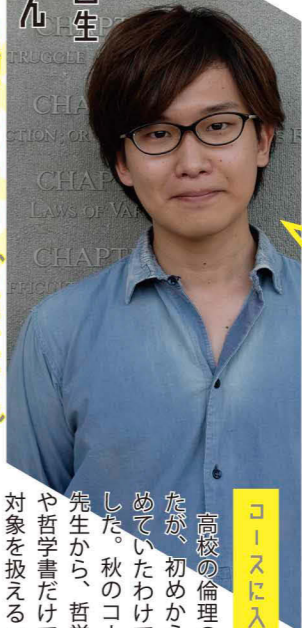
哲学は難しいというイメージを持たれるのは、物事を抽象的に表現したり、調べてもわからない問題について考えたりするからでしょう。哲学は、個々に起こっている具体的な出来事より、それらに共通する普遍的な事柄を探求するので、どうしても抽象的な言葉づかいになります。市大文学部の哲学コースは西洋哲学を扱っており、宗教哲学・美学・倫理学(道徳哲学)の教員もいます。大学で哲学を学びたいと決めてきた学生も少

なくないコースです。誰でも人生の中で哲学的な問題について考える場面は必ずあるものですが、そのひとときが大事だと思える人のための学問です。

オススメの人

哲学といってもいろいろな考え方がありますので、大学で哲学をやりたいならまずはある程度哲学史を学んでおいた方がいいかもしれません。哲学史についての読みやすい本としては、今道友信の『西洋哲学史』がお勧めです。講義を記述したものであるので読みやすいですし、内容も正確だそうです。

哲学コース3年生 平尾慧嗣さん



高校の倫理の授業は好きでしたが、初めから哲学コースに決めたわけではないです。秋のコースガイダンスで先生から、哲学コースは哲学者や哲学書だけでなく様々な研究対象を扱えるコースであるという話を聞いて興味を持ち、その後先生の研究室に伺い、コースでの学びについて教えていただいたことがきっかけです。

コースに入ってきたきっかけ

「流行」とは何か? 国語事典には「①服装・言葉・思想などが一時的に世間に広く行なわれること。②病気が急速な勢いで世の中に広がること。③俳諧で、時代とともに変わり新しくなるもの」というような語義が書いてある。②は医学部③は国語国文学コースのテーマだろうから①について考える。哲学の業界にも「流行」はある。ある時期に多くの研究者が取り上げるテーマは確かにある。しかし、それが何だ。哲学の長い歴史から見れば、数十年にわたる「流行」でさえ、さざ波にも及ばない。ときどき「最近の哲学のトレンドは何ですか?」とか聞かれるのだが、内心「そんな関係ねえ!」と思いつつながら答えている。哲学とは、どんな時代でもどんな場所でも誰にでも通用する真理や正しさを探究することだからだ。「はやり」の「哲学」にしか興味がない人は、哲学をファッションアイテムとして身に着たいだけだ。人類の哲学的思索の数千年に及ぶ蓄積をなめてはいけません。新しい着想も、必ずどこかで誰かが、とつくの昔に考えついていたことに違いないのだ。(文・土屋先生)

私は倫理学(道徳哲学)の研究をしています。倫理学は、ある行為をすべきとすべきでないかという理由は何か、ということを探求します。私が通っていた大学には哲学科の中に哲学・倫理学・美学美術史という3つの専攻がありました。その中でも人はどう生きるべきかについて考えたいと思ったので倫理学専攻を選びました。私はまた、医学部で「医療倫理学」を教えたり、人権問題について研究したりしています。この大学に来る前は教職科目の「道徳教育の研究」を担当していたこともあり、小中学校の「道徳」が特別の教科になる今、改めて道徳教育に関しても取り組んでいます。ですが、これらも倫理学の中の具体的な領域として位置づけられます。研究していて楽し

いのは、人にうまく説明できなかったことに筋道が見えて、言葉で表現する方法が見つかったときです。

オススメの人

アリストテレス 誰よりも「違いのわかる男」。恐るべき観察力で万学の基礎を築く。「観察することこそ幸福であり最高善だ」と主張し、最期はアテーナイを追われ病死したにもかかわらず、その通りの幸福な人生を送ったと思われる。文章はひたすら記述的で面白味に欠けるが、読むたびに「こんなことにまで気づいていたのか」と驚かされる。

先生方はやる気があれば熱心に指導してくれます。授業の他に読書会や哲学カフェという場も設けられています。読書会では難解な哲学書を読む力を磨き、哲学カフェでは自分の疑問を他の人と共有して自分の持っていない視点から考えることができます。疑問に感じたことを言葉を使って徹底的に考える方法を学べるコースだと思います。

先生から見たコース

哲学コースにとって「流行」とは？ 歴史学の研究対象としての「流行」といえば、伝染病が思い浮かびます。中世ヨーロッパのペストの大流行は、社会を大きく変えたことが知られています。日本でも、歴史に大きな影響を与えた伝染病の「流行」が確認できます。例えば奈良時代の七三五〜七三七年には天然痘が大流行し、人口や生産力が大幅に低下して、政府の有力者たちも次々と病死しました。これにより、政府の統治方針が大きく変更されたことが知られています。また、こうした伝染病の「流行」は非常事態であり、通常時には確認できないような史料が残されることもあります。七三七年に出された政府の命令書の内容が伝わっています。そこには天然痘の治療法として、腰や腹を温める、お粥などを食べるようにし、魚や肉を食べるはならない、などといったことが記されています。これは、当時の医療を考えると貴重な史料といえます。伝染病の「流行」は、いうまでもなく不幸な出来事です。その一方で、過去の社会の様子や、困難を乗り越えてきた人々の生活のさまを知る、大きな手がかりともなるのです。(文・磐下先生)

誰でも哲学的な問題を考える場面はある(土屋先生)

哲学コース 准教授 土屋貴志先生



コースに入ってきたきっかけ 高校の倫理の授業は好きでしたが、初めから哲学コースに決めたわけではないです。秋のコースガイダンスで先生から、哲学コースは哲学者や哲学書だけでなく様々な研究対象を扱えるコースであるという話を聞いて興味を持ち、その後先生の研究室に伺い、コースでの学びについて教えていただいたことがきっかけです。

先生から見たコース

学生が気軽に使える文学部棟の220教室は授業の準備をしたり、先輩方もお話できる場所です。また、先生との距離も近く気軽に質問に行くことができますのでいろんな人と仲良くできるコースだと思います。毎年、世界史コースと合同での遠足や旅行があり、日本史コースとしては夏休みに和泉市の教育委員会と合同調査を2泊3日で行なっています。